

「熟議 2012 in 兵庫大学」の特徴

1. 「熟議 2012 in 兵庫大学」概要

兵庫大学で開催された「熟議 2012 in 兵庫大学」は下記のとおり文部科学省と兵庫大学の共催により開催された。

開催日：	平成 24 年 7 月 1 日 (土)
参加者：	高校生 12 人 大学生 12 人 社会人 51 人 高齢者 38 人 合計 113 人
見学者：	49 人
会場：	兵庫大学第 2 号館
テーマ：	生涯学習社会の構築

「熟議 2012 in 兵庫大学」の実施に際しては、討論型世論調査手法を応用すること、また学生の成長の機会とすることの 2 つの大きな特徴を有している。

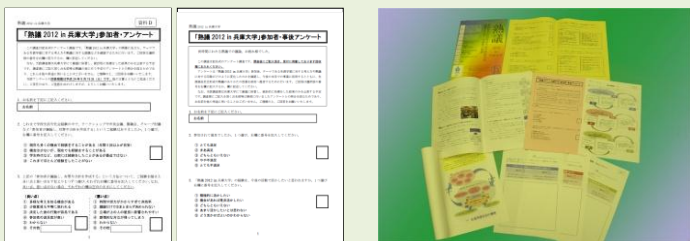
2. 討論型世論調査の応用

市民による熟議が民主主義における意思の決定に資するよう、その意思の方向性を確認するための討論型世論調査は、原発の存続を巡る国民の意向の把握でも活用されたが、特定の課題に関する議論を重ね、それが参加者にどのような変化をもたらすかを計測する手法である。

文部科学省による「熟議」の定義「熟慮して議論する」を踏まえ、「熟議 2012 in 兵庫大学」では、掲げたテーマについて参加者が熟慮をする期間と議論をする場面とに分け、熟慮した結果、テーマについてどう考えたのか、またそれが議論後にどう変化をするのかをアンケートで調査を行った。討論型世論調査の場合、意見は無作為抽出された参加者を対象とするが、「熟議 2012 in 兵庫大学」では参加希望者を対象とするという違いがある。

事前、事後のアンケートでは、生涯学習の参加状況や熟議に対する感想の他、共通して生涯学習社会に関する要素である、「生涯学習の必要性・目的」「生涯学習および生涯学習社会の意義」「生涯学習の現状および推進」に関する複数の意見への賛否を 5 段階で回答する内容を含むものであり、討論型世論調査同様に、熟議の結果として生涯学習社会の構築における課題の状況とその変化を数値として示すことができる。

さらに熟議の手法についての設問を通し、熟議の手法が民主主義において機能をするのか、熟議の民主主義における有用性を測定する。



3. 学生の成長の機会

「熟議 2012 in 兵庫大学」を学生の成長の機会とするために、テーマに関心があり、また人との会話を好む学生を選抜した。熟議をワークショップ方式で行うため、ファシリテーターの役割が重要であり、学生にその役割を託した。学生は 4 回に亘るワークショップに関する理論と実践の講義と演習を受け、ファシリテート技術を身につけた。

学生の成長の機会とする以上、その成果を把握する必要もある。ファシリテーターとしての経験だけではなく、事前の講義と演習も重要であり、講習前と熟議後、学生同士による振り返りの後、評価項目について、自信があるかを 5 段階で自己評価を行う「学生の成長シート」を用いてその成長を把握した。評価項目は下記の通りである。

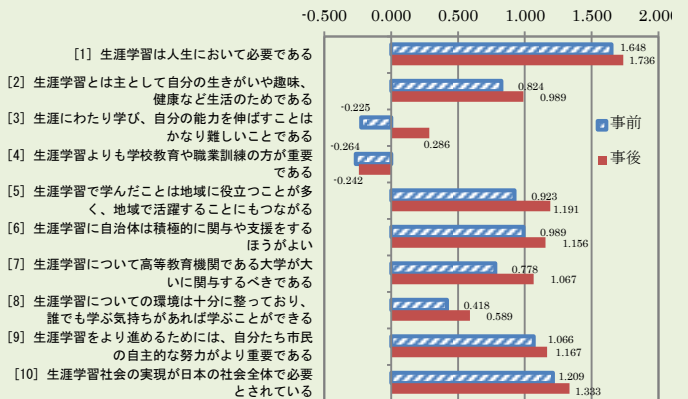
- “前に踏み出す力”： 自主性、交渉力、実行力
- “考え抜く力”： 対応力、思考力、計画力
- “チームで働く力”： 会話力、規律性、運営力、貢献性

これらは学士力に関わる内容を踏まえた項目であり、学生の成長シートにはそれぞれの能力についての詳細と事例を示し、学生に対して評価の意義も含めて説明を行い、自己評価であっても客観性を持って自己を見つめるようになっている。

生涯学習社会に必要なものは何か

1. 生涯学習社会の構築に必要なもの

事前、事後のアンケート調査結果から、生涯学習社会の構築に必要な点を明らかにする。下記は事前、事後調査において設問事項ごとの賛否を得点化したものである。賛否が均等であれば 0.0 となる。



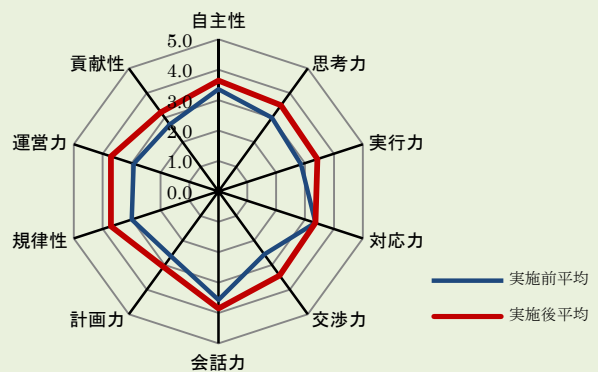
得点の高さから生涯学習の必要性、さらには生涯学習社会の実現が必要とされることを多くの人が認めていることがわかる。また生涯学習が自分の趣味や生きがいである、という得点よりも地域で役立つことが多いとの得点が高く、生涯学習が生きがいだけではなく、それ以上に社会に生かすことを重視し、それが自己実現につながることを多くの人が認識している。

事前と事後の変化では、議論の後、どの項目においても、生涯教育を重視する方向に意見が変化している。項目の中で、特に大きな変化があったのは、「生涯学習の学びが地域に役立つ」「生涯学習に大学が関与すべき」「誰でも学ぶ気持ちがあれば学ぶことができる」という 3 点である。人々は学ぶ気持ちを常に持ち、生涯学習の成果を地域へ還元し、地域の学ぶ拠点としての大学の役割が重視されることが、生涯学習社会を確立するために必要な要素であり、議論を通し参加者がその認識を持つように変化した。

では、学びの成果を還元する生涯学習社会構築のため、大学の役割を含めて何が必要か。地域生涯学習システムに関する研究を今後進める必要性が明らかになった。

2. 学生はいかなる能力を伸ばしたか

学生ファシリテーター 14 名の実施前後での能力に対する自己評価の得点の平均を比較したものが下記である。



ほとんどの能力において、実施後では、自己評価が高くなっており、熟議が学生の成長に寄与したことは明らかである。ただし対応力についてはやや低下し、むしろ実践を通し、対応の難しさを感じたようである。

特に、交渉力、運営力、規律性の変化が大きいが、これらは大学の座学では修得の難しい能力でもある。これらの能力が向上した背景には、ファシリテーターには人に働きかけ、またグループをマネジメントする能力が求められることがある。短期間であっても、事前教育、振り返りを含めた充実した熟議プログラムがあれば、これらの能力の向上に結び付けることが可能である。さらにワークショップを進める中でルール的重要性を知り、ファシリテートの場面でそれを発揮することができたことから、学生は規律性の向上を実感したと思われる。

熟議の成果を活かす

FD (Faculty Development)へ活かす

1. ルーブリックの評価基準への応用

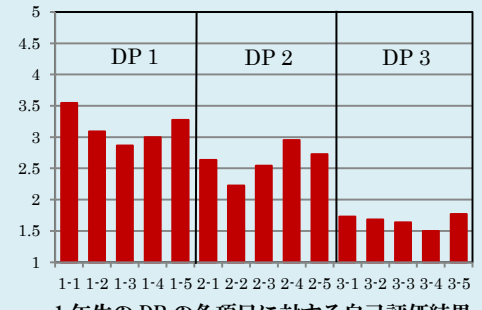
学生の学習到達状況を評価する評価基準表、ルーブリック。学生の評価基準を明確にするなど教育の質の保証の一環とされ導入が進む。ルーブリックは各評価項目に対し学生の到達度を計測する一覧表形式で、熟議の際の「学生の成長測定シート」もルーブリックの応用である。成果に示したように、同シートによりファシリテーターを務めた学生の能力の把握が可能であった経験も踏まえ、平成24年度Ⅱ期(後期)より学生の自己評価による調査「学生アンケート」を導入することとなった。同アンケートは全学生を対象に各学科のディプロマポリシー(DP)の各項目について学習を通し自信を持つことができたかを5段階で自己評価する方式である。自信の度合いによる自己評価の面で「学生の成長測定シート」の経験を活かす。

項目	到達レベル	5	4	3	2	1
1-1	1-1-1	5	4	3	2	1
1-2	1-2-1	5	4	3	2	1
1-3	1-3-1	5	4	3	2	1
1-4	1-4-1	5	4	3	2	1
1-5	1-5-1	5	4	3	2	1

熟議の際の「学生の成長測定シート」

項目	到達レベル	5	4	3	2	1
1-1	1-1-1	5	4	3	2	1
1-2	1-2-1	5	4	3	2	1
1-3	1-3-1	5	4	3	2	1
1-4	1-4-1	5	4	3	2	1
1-5	1-5-1	5	4	3	2	1

兵庫大学のDPに対する「学生アンケート」



1年生のDPの各項目に対する自己評価結果

2. 評価結果について

同シートは学科別の分析の他、学生個別に卒業までの経年を評価する。右図はある学科の1年生による現時点でのDP各項目に対する評価の結果(学科平均値)である。到達レベルが明示されるルーブリック同様、DPも卒業までに身につけるべき能力の階層性を有する(DP1が低く、DP3が高い)ためその評価は到達状況把握に有効である。結果を見ると1年生ではDP1の項目について高いもののDP3の項目では低くなっている。

生涯学習社会構築のために活かす

1. 官学共同研究の実施

「熟議2012 in 兵庫大学」で残された課題として示した、地域における生涯学習システムの構築を目指し、平成25年度より、兵庫県及び兵庫県いなみの学園(公益財団法人 兵庫県生きがい創造協会運営)との共同により「生涯学習の現代的意義と地域における生涯学習システム構築に関する研究」を実施する。当該研究では、グローバル化の進展や少子高齢化が大きな課題となる中、生涯学習が学び続けることによる人的資源の質の向上など、生きがい作りのみならず人材養成の観点から、国や地域の競争力向上に不可欠との認識の下、地域を基盤に行政や高等教育機関を含む複数のエージェントによる生涯学習サービスの提供、学びの成果を活かしたさらなる学びを促進する環境の整備等、地域での生涯学習のシステムの構築が必要との仮定から本研究は次の2点を目的とする。

- ① グローバル化・少子化を迎える現代の日本における生涯学習の目的の再検討
- ② 多様な機関・組織の連携・協働による個別のニーズに対応する生涯学習システムの構築

この成果は兵庫大学のみならず、広く地域に密着した多くの大学における競争力向上に寄与すると期待される。

2. 「熟議2013 in 兵庫大学」の実施

大きな成果を上げた「熟議2012 in 兵庫大学」の大きな成果を踏まえ、平成25年11月を目途として「熟議2012 in 兵庫大学」を開催する予定である。テーマは引き続き、生涯学習社会の構築であり、その目的は生涯学習社会の構築のためのより具体的なあり方を、市民や高齢者、学生、高校生など多様な参加者とともにワークショップにより検討するものである。

兵庫大学エクステンション・カレッジ(HEC)構想

1. HEC構想について

兵庫大学・兵庫大学短期大学部はその立地特性を踏まえ、地域における生涯学習拠点たる大学を目指している。その主要な役割を果たす機関として兵庫大学エクステンション・カレッジ(HEC)を、平成26年度を目途に整備する。HECは生涯学習機関として、各種の講座を開講するエクステンションセンターと指摘の機能を有するだけでなく、兵庫大学の地域の核(COC)としての役割を強化するため、学生は地域を舞台に、地域住民は大学を舞台に学ぶ「エリア基盤による双方向学習」を可能にする。すなわちHECは、(1)ニーズの把握・カリキュラム作成・実施・評価に至る生涯学習サービス機能、及び、(2)生涯学習の成果を活かしての地域での活動を支援し、また兵庫大学生の地域交流を促進する連携窓口機能を、を有し、これらが同一機関にて機能することで地域生涯学習システムの要となることが期待される。

2. HECの基盤となる活動

HECの実現のため地域連携の枠組みとして、平成18年に「加古川市、加古川商工会議所、兵庫大学との連携協力に関する協定」「稲美町と兵庫大学との連携協力に関する協定」を締結、また平成21年に「特定非営利活動法人シーズ加古川と兵庫大学及び兵庫大学短期大学部との連携協力による協定」、平成23年「兵庫県いなみ野学園・兵庫大学・兵庫大学短期大学部との連携に関する協定」を締結した。

なお平成24年度の兵庫大学・兵庫大学短期大学部が主催する公開講座・講演会は28、受講者数は延べ人数で4314人である。



外観イメージ図



コミュニティルームイメージ図